

動詞の自他被使動の研究

松下大三郎

總説

動詞の自他動に關し我が國現時の學者の意見は三派に分れてゐる。

一は實質派、二は外形派、三は懷疑派である。一の實質派は意義の實質に由つて自他動を區別しようとするもので例へば「人が酒を飲む」の「飲む」の様なものは他物を處置するのであるから他動だ
が「鳥が空を飛ぶ」「人が道を行く」の「飛ぶ」「行く」の様なものは「空」や「道」を處置しないから
他動ではないと云ふ様な類である。

二の外形派は意義の實質に拘らず、文字に表はれた外形に由つて自他動を辨ずるもので、例へば「空
を飛ぶ」の「飛ぶ」も「何々を」といふ客語を受けて居るから、意義の實質はどうでも、動詞は「酒
を飲む」の「飲む」と同様他動であると論ずる。

三の懷疑派は新しい學者に多い。これは自他動の區別を疑ふもので動詞に自動他動などといふ嚴正
な區別はないといふのである。元來自他動などといふとは人間が便宜上勝手に設けた區別であつて大
體はそれで分けられるが凡べての動詞を分けることは出来ない。中には自動とも他動とも附かない様

なものも出て来る。英語などでも自他動の別の分らないのがあるが、殊に日本語には其れが澤山有る。其れを強ひて自他動の二つに分けようとするのは愚なことである。「空を飛ぶ」の「飛ぶ」などは自他動を以て律すべきでない。自他動などといふことは餘り問題にしないが善いといふのである。

此の三種の見解は何れが正しいであらうか。余は此の三種以外に一派を立てようと思ふ。三派とも缺點があると思ふ。

實質派が意義の實質に由つて自他動を分けようとするのは間違であると思ふ。それでは動詞の自他動ではなくて事件の自他動である。人の死んだのを見て他殺か自殺かを論するのは其れは法醫學上のことか何かで文法とは關係はない。他動であつても自動詞を用ゐて「死んだ」と云へる。老病で死んでも他動詞を用ゐて「老が人を殺した」と云へる。事件の實質は文法とは別だ。

外形派が文字の外形に用つて自他を論するのは餘り淺薄である。學問はもう少し理論的でないならぬ。

懷疑派が自他動の區別を疑ふのは少し早計ではなからうか。懷疑と云つても認識論の深刻な懷疑ではないから自他動の區別は意義の實質と文字の外形と以外にまだ求め得べき餘地が有りはしないかといふことを考へなければならぬ。

余は自他動の區別を觀念との聯合の形式に求めようと思ふ。その形式が他動の形式であるならば意義の實質(事件そのもの)は自動的であつてもその動詞は他動である。又文字の外形に於て「を」が無くても同様である。此の主義で行つて動詞の自他動の區別は徹底的に明確であると思ふ。文法學

は形式の學である。自他動の別は何處までも形式に由らなければならない。

自他動の區別と共に被動使動の問題があるが、これもやはり形式に據る區別でなければならない。

遠くへ行かない

行きたいが行けない

貴方は何時彼處へ行かれますか

の「行かれ」「行け」「行かれ」が被動であるか可能態であるか又敬語であるか、又

人を笑はせる

子供を勉強させる

の「笑はせる」「勉強させる」が他動であるか使動であるかなども皆觀念聯合の形式に由つて論せられることになる。

動詞の自他動の別は文法上非常に重要な問題である。何となれば其れが連詞の構成法に大なる關係があるからである。唯道樂に分類するのではない。

併し此の論を立てるには先づ動詞の意義を定めて掛らなければならない。又動詞には色々の種類があるから自他動や被使動に關係のある分類をしなければならない。

動詞の定義及び分類

動詞は作用の概念を表はす詞である。

認識の対象たる現象には主體と作用との二面がある。「鳥が飛ぶの」も一つの現象であるが鳥は主體で「飛ぶ」は作用である。主體たるべき方面は他の作用に對して客體たる場合がある。その場合には客體と作用とが一緒になつて一つの作用になるのである。主體たるべき方面をその主體と客體とに共通な點から觀察して之を事物といふ。名詞は事物を表はし動詞は作用を表はす。

事物でも作用でも本體と屬性との二方面がある。「彼の鳥」は一つの事物、「中々飛ぶ」は一つの作用であるが「鳥」と「飛ぶ」は本體で「彼の」と「中々」は屬性である。名詞と動詞とは本體を表はし副詞と副體詞とは屬性を表はす。勿論接續詞は副詞の一種、前置詞は副詞又は副體詞の一種である。自他動及び被使動を論ずるに必要な、動詞の分類は次の如くである。

一、單詞的動詞と連詞的動詞 「行く」「歸る」「讀む」「書く」などの様に「單詞より成つて之を分解すれば詞でなくなる動詞を單詞的動詞といふ。又「東京に行く」「國に歸る」などの様に二詞以上が相連つて一つの事柄を表はして居るものも一つの動詞である。之を連詞的動詞といふ。連詞的動詞は對内的には二詞以上であるが、對外的には一詞である。

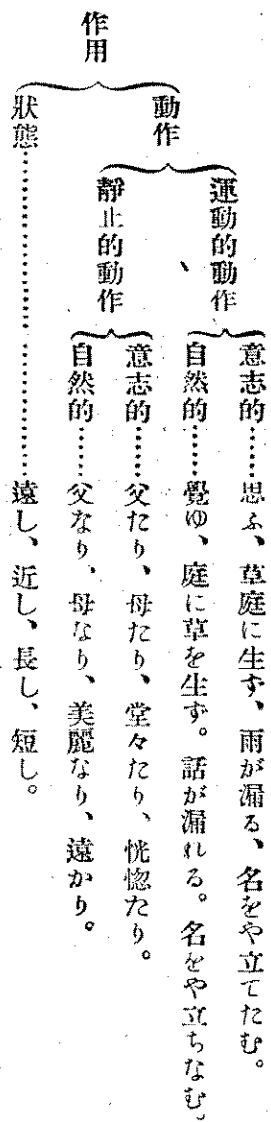
二、單念動詞と複念動詞 「行く」「歸る」などは一動詞が一概念を表はすから單念動詞である。併し「行かせる」「歸られる」などは「行か」と「せる」又は「歸ら」と「れる」との二概念を表はして居る。こういうのは複念動詞である。供し「行きます」「行つた」などは複念ではない。連詞的動詞は皆複念である。

三、動作動詞と狀態動詞 動詞は作用を表はす詞であるが作用には動作と狀態との二種がある。「波

が起つ」は動作であるが「波が高い」は狀態である。動作とは事物の作用を時間といふ形式に由つて認識したものを云ひ、狀態とは時間といふ形式に由らずに認識したものをいふ。

作用に動作と狀態との二種があるから、動詞は分れて動作動詞と狀態動詞との二種となる。從來は狀態動詞を形容詞と云つて別の品詞としたが形容詞といふ名稱は甚だ不都合である。元來形容詞は Adjective の譯語であつて敘述的能力の無い詞、換言すれば作用を表はさず唯屬性だけを表はすもので、日本語では「此の」「或る」「有ゆる」「大した」などの類である。然るに日本文典で動詞の一種なる「遠い」「長い」の類を形容詞といふのは國語教授と英獨語教授と並べ行ふ上に於て甚だ不都合だ。

動作動詞は動作を表はすのであるが動作には運動的動作と靜止的動作と二種がある。そこで動作動詞は運動的動作動詞と靜止的動作動詞との二種に分ける。



運動的動作にも靜止的動作にも各々意志的と自然的との別がある。「父たり」と「父なり」との區別

などがこれである。

1 管仲、齊に相たり 2 管仲は齊の相なり

1の「相たり」は意志的動作である。管仲に人格を認めて居る。管仲は「相たり」に對する意志體である。意志體であるからその動作に對して自由を有して居ると同時にその動作を爲すには自己の努力を要する。それであるから「相たり」は管仲の一時的動作であつて管仲の本性ではない。管仲の意志が變つて努力が消滅すれば「相たり」といふ動作は同時に消滅するのである。所が2の「相なり」は管仲をその動作の主體とは見るが其の人格を認めない。即ち意志體と見ない。管仲は「相なり」に對して全く意志がなく全く努力を要しない代りに全く自由を持たない。「相なり」は管仲の一時的の出來事ではなく管仲の本性を説明して居る。「名をや立てなむ」と「名をや立ちなむ」なども意志的と自然的との別である。自動と他動とを論ずるに動作に意志的と自然的と兩方有ることを忘れてはならない。

四、依據性動詞と非依據性動詞

舟に乗る

椅子に凭れる

席に着く

蒲團に座る

東京に居る

日本に在る

人に便る

友達に逢ふ

の——は依據動詞である。依據動詞は作用の概念を分解して作用其自身の概念と作用の客體の概念と

の二つとし作用其の物が客體に依據するとして兩概念を統合し、客體の概念を控除して作用其の物の概念のみを表はす動詞である。右の例の「乗る」は「舟」に依據し「凭れる」は「椅子」に依據し、自己は依據に關して本體であつて「舟」「椅子」を客體とするが自己は唯その本體を表はすのみで客體は表はして居ない。客體は他詞「舟」「椅子」をして表はさせるのである。此の客體を表はすものを客語と云ひ、客語を有する「乗る」「凭れる」などを歸着語といふ。

依據動詞は歸着語になる。そうしてその客語は依據的の客語「何々に」を用ゐる。

非依據動詞は他物へ依據しない動作を表はすもので「讀む」「拵へる」「知る」「忘れる」などの類である。併し此れ等も之を依據化せしめて用ゐる場合はある。

机に書を讀む

娘に着物を拵へる

雲行に天氣を知る

公務に私を忘れる

の——などは本來非依據動詞であるものを特に依據化した臨時の依據動詞である。

依據動詞の中「居る」「在る」等は其の動作が靜止的であるがその他は進行的である。そこで依據動詞を靜止的と進行的とに分ける。

五、出發性動詞、非出發性動詞

井から水が出る

國から手紙が來た

彼の人から聞いた

此處から見渡す

の——は出發動詞である。某處から出發する動作を表はしてゐる。その客語(——)は出發格(何々か

動詞の自他被使動の研究

ら)を用ゐる。

「讀む」「拵へる」「死ぬ」「殺す」などは非出發動詞である。勿論「三頁から讀む」「豆から豆腐を拵へる」などの様に出發化せしめることは出来る。

六、自象動詞と屬象動詞 主語を要しない動詞がある。「そうです」などはそうである。これは作用の觀念から主體の觀念が分解されて居ないものである。作用が其れ自身の作用なのである。一般の動詞はある主體に屬する作用を表はすから屬象動詞である。例へば「花が咲く」の「咲く」は花といふ主體の屬象を表はす。

七、歸着動詞と非歸着動詞 何等かの客體を有する動詞を歸着動詞といふ。例へば「花を見る」「國に歸る」の「見る」「歸る」は「花」「國」を客體として意義が之に歸着する。何等の客體をも有しない動詞を非歸着動詞といふ「死ぬ」「泣く」「叫ぶ」などはそうだ。

自動と他動

動詞に自動性動詞と他動性動詞との別がある。此の區別は事物の作用に特別の材料を要するかどうかの區別である。作用に特別の材料を要しない動詞を自動詞と云つて、作用に特別の材料を要するものを他動詞といふのである。

1 花が散る

2 風が花を散らす

人が死ぬ

賊が人を殺す

1は自動で 2は他動だ。「散る」「死ぬ」といふ動作には別に材料は要らない。單に「花」「人」だけで出来る。併し「散らす」「殺す」には動作の材料としての他物が要る。風は散らすべき物無しで散らすことは出来ない。賊も殺すべきもの無しに殺すことは出来ない。「花」「人」を作用の材料として作用の中へ引張り込まなければその動作が成立しない。併し他物を材料に供用するといふことは、概念と概念との統合の形式上に於ていふのであつて實際の動作を云ふのではない。實際の動作はそれは一つの客觀的現象であつて自動、他動の區別はない。地震が家を倒したのと家が地震に因つて倒れたのとは實際の地震には區別はない。唯人間が地震を主にして考へて他動的概念(倒す)を作り、家を主にして考へて自動的概念(倒れる)を作るだけであつて實際の震災に在つては二種の場合の對象たるべき兩面を持つて居るのである。他殺と自殺などでも人間が或る標準を設けて區別するだけで、考へ方に由つて他殺も人の揮ふ刀に由て傷死したとも考へられ、自殺も社會の迫害が人を殺したとも考へられる。それであるから動詞の自他動を文法上から區別するに自殺と他殺を區別する様な非文法的標準を以て區別してはいけない。

從來他動詞を定義して他動詞は他を處置する動作を表はすものと云つた。此の處置といふ語に拘泥して「犬が子供に食ひ附く」の「食ひ附く」を他動だと解いた學者もある。「食ひ附く」は犬が子供を處置したので子供は大に痛癢を感じるといふのである。「食ひ附く」といふ動作は子供に害を與へるには相違ない。併し其れは事實上の問題で、犬其の物子供を處置したのであつて「食ひ附く」といふ概念が子供と云ふ概念と處置的に統合してゐるのではないから、他動詞とは云へない。「犬が人を噛む」と云

つた場合には「噛む」は他動である。それは人が迷惑するからではない。「噛む」といふ作用概念が「人」といふ概念を自分の方へ引附けて自己の作用中に消化してその作用に對して材料化するといふ形式を以て二概念が統合されるからである。「子供」に「噛み附く」に至つて「噛み附く」は依據動詞であつて「噛み附く」といふ概念が子供の概念の方へ進行して子供の概念へ依據するのである。

自他動の別は概念運用の形式上に在る。概念と概念との統合上の關係に在る。即ち觀念が分解されて二概念となるその分解され方に在る。全く形式上の問題である。他動とは他物の作用を自己の作用に同化することを云ふのである。「花が散る」の「散る」は花の作用であつて花の自動である。それを「風が花を散らす」といふとその「散らす」は花の作用たる「散る」を風の作用に同化せしめて考へたのであつて「散らす」は風の花に對する他動である。「散らす」も風に對しては自動であるが花に對して他動なのである。元來同じ事件であるが其れが甲の作用として觀れば甲の自動で、この作用として觀れば乙の甲を客體とする他動なのである。全く唯觀方の區別である。事件の實質は問題ではない。人が他人に殺されずに病死した場合でも病氣が人を殺したと考へられ、自殺した場合でも人をその人自己が殺したと考へられ、又甲が乙を殺した場合でも乙が死んだと考へられる。唯「犬が人を噛む」といふ様な場合に「噛む」を、人の動作を犬の動作に同化して考へたのだと論ずる場合に他動詞は對稱的他動詞、單獨的他動詞の別を生ずる。

他動詞は作用の觀念を分解して、作用其の物としての概念と、作用の材料としての概念との二つとし、材料の概念を控除し作用其の物の概念だけを表はすものである。材料の概念は控除してあるから其れだけは缺損になつてゐる。その缺損はさ他語をして表はさせる。「何々を」は即ちそれである。此れは名詞的他動格を用ゐるのであつて他動詞に對して他動的客語と云はれ、他動詞の方は客語に對して歸着語と云はれる。他動詞はその他動的缺損が客語に由つて補はれて始めて意味が具備するのである。他動詞といふ概念の内包は右の説明で略盡して居るが、その外延を説明するのに分類の必要がある。

對稱的自他動と單獨的自他動

他動詞と自動詞と兩々相對立して居るものを對稱的自他動詞といふ。

自 動

1 花が散る

木が枯れる

山が見える

本が出る

2 人が死ぬ

本が出来る

子供が學校へ這入る

他 動

風が花を散らす

蟲が木を枯らす

人が山を見る

本屋が本を出す

賊が人を殺す

學者が本を拾へる

親が子供を學校へ入れる

右の例は上段でその作用の主體(●)として居るものを下段では客體(●)にして他物の作用に同化せしめて居る。上段と下段とは主客が變つただけである。自他動の區別を教へるにはさういふ例が一番分

り易い。

對稱的自他動は多くは 1 の様に活用を變へて區別するが、中には別々の詞を用ゐるものもある。2 はそれである。

自 動

風が吹く

他 動

風が木を吹く

人が笑ふ

人が貴方を笑ふ

子供が哭く

子供が餓を哭く

人が饒舌る

人が下らぬことを饒舌る

右の様なのは對稱的自他動ではない。之を圖解すると次の様になる。

自 動

風が吹く

他 動

天が風を(起す)

木が(靡く)

風が木を吹く

若し「風が吹く」の「吹く」が活用を變へるかどうかして「風を起す」といふ様な具合の意味に使はれるならば、其れは他動の「吹く」に對する對稱的自動と云へる。「木を吹く」の「吹く」も「木が靡く」といふ様な具合の意味に使はれるならば其れは他動の「吹く」に對する對稱的自動と云へるのであるが不幸にしてさういふ用法が無い。自動の「吹く」は他動の「吹く」とは對稱的でない。喩へば此の二者は父子の關係ではなく伯父と姪の關係だ。子は子だが自分の子ではなくて自分の兄弟の子

だ。伯父に子が無く姪に父が無いために知らない人は二人を親子と思ふかも知れないが其れは違ふ。こゝにいふ動詞は動作の材料たるものに對して明確な概念が起らずに漫然動作を考へた場合には自動詞となり、材料の概念が明確に分解された場合には他動詞となるのである。名を附けたら明暗自他動とでも云へようか。

他動詞が有つて其れに對する自動詞の無いものを單獨他動と云ひ、其の反對を單獨自動といふ。

本を讀む

字を書く

水を汲む

茶を飲む

鼓を打つ

笛を吹く

人を斬る

音樂を樂む

の——の様なのは單獨他動詞である。之に對稱的な自動詞は無い。併しそれは詞が無いだけでその概念は作れないことはない。例へば若し茶に意志が有つて茶の方が茶碗を持ち上げて進んで人の口へ這入る様なことが有るとしたら「飲む」の自動詞が出来るであらう。さういふ事は無いにしても若し茶の方を主にして云ふ習慣が生ずれば「飲む」の自動が出来る譯である。現に「賣る」などは元來單獨他動詞であつたのであるが、商人が品物を主にしていふ習慣が出来た爲に「彼の本は賣れました」などといふ。此の「賣れる」は「賣る」の對稱的自動詞である。「讀める」「飲める」などの様な可能動の意味を持つたものとは違ふ。

「人が茶を飲む」の「飲む」は茶の動作を人の動作に同化させて考へた概念である。茶の動作は茶が自動詞の自他動使動の研究

人の口へ這入ることである。吾々の頭にさういふ概念が起つて居らないからさういふ意味の自動詞がないので、概念は無くして直観的の觀念は有る。その觀念を概念にする場合に茶の自動とせずに人の他動とした概念即ち「飲む」が生じたのである。

人が居る

父母が有る

空が近える

人が眠る

雨が降る

日が影る

彼は學生である

此れは私の帽子でございます

の——などは單獨自動詞である。之に對稱的な他動詞が無い。併し其れは詞が無いだけで概念の成立は可能である。現に漢文では「我有父母」の「有」は日本語の「有る」に對稱的な他動であり「若不施德惡能有天下」の「有」は「在」に對稱的な他動である。

前に挙げた「風が吹く」「風が木を吹く」などは對稱的自他動ではないからその自動の方は單獨的自動で、他動の方は單獨的他動である。

狀態動詞は從來形容詞と稱して自動でも他動でもない様に考へたが矢張り自他動の中に在る。近時の文話や口語では狀態動詞は大體單獨自動だ。

意志的他動と自然的他動

動作動詞に運動的動作の動詞と靜止的動作の動詞と有り其れ等に各々意志的と自然的の二種の有ることは前に述べた通りである。他動詞でも自動詞で其れには變りはない。多くの他動詞は大抵は意志

的他動であるが、又自然的なのがある。

女郎多かる野邊に宿りせばあやなくあだの名をや立ちなむ

一徳冠者と名を附きにけり

の「立ちなむ」「附きにけり」などがその例だ。「名を立てぬ」「名を附けぬ」と云へば意志的他動であるが「名を立ちぬ」「名を附きぬ」と云へば自然的他動である。自動ではない、自動ならば「名立ちぬ」「名附きぬ」である。「名附きぬ」「名立ちぬ」は名の動作で名の自動であるが、「名を附きぬ」「名を立ちぬ」は名の動作ではなく人の動作である。人が「名」に興へた動作である。併し人が故意に名を立てたのではなく名を立てられてその結果名を得たのである。名の方から云へば名が立つたのであるが人の方から云へば名を得たのである。「名を立てぬ」と「名立ちぬ」とは同一事件であるか一方は人を主にして云ひ、一方は名を主にして云つたので前者は自然的他動で後者は意志的自動である。そこで自動詞の「立つ」「四段活」を活用を變へずにそのまゝ使つて唯その主體を客體にして自然的他動詞としたのである。意志的他動の方は「名を立てぬ」であつて此れは活用まで變へてゐる。

自然的他動と自動とは形式が違ふだけで實際の意味が同じであるから同義自他動と云ふ。

自 動

浮名や立たむ

浮名をや立たむ

我に斗酒有り

我有斗主

一人息子が死んで仕舞つた

一人息子を殺して仕舞つた

彼の人は財産が無くたつた
仰げば明月見ゆ

彼の人は財産をなくした
仰げば明月を見る

琴聲微に聞ゆ

微に琴聲を聞く

これら皆同義自動詞である。

併し同義自動の無い自然的他動詞もある。

空腹を感ずる

腹痛を覚える

既に秋冷を催せり

轉んで膝を打つ

などには同義的自動がない。

虚主的他動 自然的他動は、自動の主を客にして自動を他動にしたものであるから自動の時に總主であつたものが自然的他動の主になるのである。例へば「我れ浮名立ちぬ」が「我れ浮名を立ちぬ」となれば「我れ」は前者では自動の總主で後者では自然的他動の主である。然るに自動に於て總主のないものを自然的他動にすると主語が無いことになる。例へば

是の年大雨降る

是年下大雨

中天明月懸、令嚴夜寂寥

中天懸明月、令嚴夜寂寥

客有り余に問うて曰く

有客問余曰

庭に草生す

庭に草を生す

右の例の上段の(○)は主であるが下段に於てはそれが客(●)であるから下段の動詞には主が無い。

作用が有つて主體の無いといふことは有るべきでないから主體はあるのであるが其の概念が餘りに普遍的で餘りに抽象的であるために人はそれに對して明瞭な概念を持たない場合が多い。そういふ不明確な概念は詞に著はれない。若し強ひて概念を明瞭にすれば其れは「天」とか「自然力」とか「世」とが云ふことである。

是年、天、下大雨

中天、造物懸明月

世有客問余曰

自然が庭に草を生じた

といふ様なことになるのである。こういうのは通常主體概念は不明瞭なまゝ主語なしに使はれる。之を虚主といふ。勿論虚主は自動にもある。

春になつた(季節が)

少し暖かになつた(氣候が)

お歸りになつた(その人の動作が)

來月になれば(時が)

などは虚主的自動である。

形容詞の自然的他動 形容詞の他動といふことは不思議に感ずるかも知れないが形容詞即ち状態動詞は矢張動詞の一種であるから自動の別が有るべきだ。無いならば其れこそ不思議である。

形容詞即ち状態動詞は大抵自動であるが自然的他動に使はれるものがある。

自動

他動

親の怨めし

親を怨めし

動詞の自動他動の研究

借りた本が難有い

御本を難有うございます

四四

これ等は矢張同義自他動である。

又古文にはクシク活に次の様な轉活用が有つた。

〔ク 活〕

早

く

し

き

けれ

自動

〔ク活轉用〕

早

み

み

み

み

自然的他動

活用は第二活段へ「て」を附けて方法格にするのであるがクシク活の轉用の第二活段たる「み」は「て」を附けずにそのまゝ方法格になる。

1 瀬の早くて

2 瀬を早み

岩にせかるゝ瀧川のわれても末に逢はむと思ふ。

1 山越の風時じくて

2 山越の風を時じみ

寝る夜落ちず家なる妹を懸けてしぬびつ。

1 秋の田のかりほの庵の苫の粗くて

2 秋の田のかりほの庵の苫を粗み

我が衣手は露にぬれつゝ。

2 は自然的他動で 1 の自動と同義である。1 が「瀬が早くあつて」の意であるとすれば 2 は「瀬を早く持つて」の意である。

前にも云つた通り自他動の別は觀念分解の形式上に在るので甲物の作用を乙物の作用に同化せしめて考へた場合にこの作用は乙の甲を客とする他動なのである。「瀬が早い」の「早い」は瀬を主體と

する瀬の作用であるが其れを他物（瀧川）の作用に同化せしめ瀧川の作用として觀察すると「瀬を早み」（瀬を急速的狀態に持つ）と云ふので、「瀬の早くて」と「瀬を早み」とは全く同一事件なのであるが唯その觀方が違ふだけである。

他動を必ず意志的、努力的、故意的でなければならぬと考へるのは間違である。

1 刀を揮つて人を殺す

2 助け様もあつたらうが、つい見殺しにした

3 彼の子に随分手を盡したがとう／＼殺して仕舞つたよ。壽命は仕方がない。

1 は意志的、故意的であるが 2 は唯救助しなかつただけである。春秋の筆法でなくとも矢張り「殺した」と云へる。3に至つては小兒の死を如何ともしやうか無かつたのである。それでも矢張り「殺した」といふ動詞を使ひ得る。誰が「3」の「殺した」を自動詞だと云ふものか。他動詞は決して意志的他動ばかりではない。自然的他動なものも澤山有る。自然的であるからこの他動ではなくて甲の自動などと云ふのはそれは動詞の自他動論でなくて事件そのものゝ研究だ。文法は事件の法則ではない。（未完）